

幼稚園における子育て支援の実践研究

杉山 弘子・坂本 由佳里

S幼稚園では子育て支援活動の一つとして未就園児とその保護者を対象にした遊びの会を開催している。ねらいは「親子と一緒に遊び、楽しい経験をする」「身体を動かして遊ぶことで親と子、子ども同士、親同士の交流を深める」の二点である。年間7回、午前10時から11時30分までの時間帯に、自由な遊びと集団的な活動を経験できるプログラムになっている。

2003年度は2・3歳児を中心に29組で出発した。4回目からはもう1グループ増やし、全体での登録数が53組になった。2002年度の実践を踏まえ、自由な遊び場面の環境構成の一つとして、毎回、製作活動のコーナーを設置した。また、通常の保育と並行して実施されていることを生かし、遊びを通じた在園児との交流を試みた。参加者の姿および参加者へのアンケート調査の結果から、遊びの会は、「親子で楽しむことができる場」、「集団で活動して楽しむ経験ができる場」になっていたと考えられる。製作コーナーでは、親子が共同しながら作ることや作ったもので遊ぶことを楽しんでいた。また、製作をしながら参加者同士が自然に交流する様子が見られた。自由な遊び場面においても、親が子どもと一緒に取り組みやすい活動を提示することの大切さを示していると考えられる。在園児が開くお店に親子が買い物に行くお店屋さんごっこは、親子にとっても在園児にとっても楽しい活動になった。保護者にとっては幼稚園生活をより具体的にイメージする機会になったと推測される。在園児と未就園児の双方にとって意味のある交流を遊びの会に位置づける可能性を示すものと考えられる。

キーワード：幼稚園、子育て支援、未就園児、遊びの会

はじめに

幼稚園における子育て支援活動の一つに、未就園児とその保護者を対象にした遊びの会があげられる。S幼稚園においても、2000年4月に現在地に移転したのを機に、位置づけも新たに取り組んできた。杉山ら（2002）は、2000年度および2001年度の実践を通して、地域の親子を対象にした幼稚園での遊びの会のあり方について考察した。そこでは、「親子がともに楽しめる場」「集団での活動を楽しめる場」「安心して参加できる場」であることの大切さが確認された。

2002年度以降はこれらの点をさらに意識化して取り組むとともに、時間帯を午後から午前に移し、時間も30分長い1時間30分にして実施することになった。ねらいは引き続き「親子と一緒に遊び、楽しい経験をする」「身体を動かして遊ぶことで親と子、子ども同士、親同士の交流を深める」の二点とした。しかし、通常の保育と並行して行うため、在園児の保育の流れを考慮したプログラムが必要となった。それとともに、在園児が遊び、生活している場であることを生かす展開も可能になった。

時間帯を移して1年目の2002年度は時間を30分長くとれることを生かし、一人ひとりが自分の好きな遊びを十分に楽しんでからみんなでの活動に入るプログラムにした。園生活の流れとも調和し、未就園の親子が在園児の遊ぶ姿を目にする機会や、園児とのかかわりも自然に生

まれると考えた。こうして始めの30分を自由な遊びの時間とし、それぞれが遊びを見つけられるよう環境構成を工夫した。しかし、親たちの中には子どもの遊びにどうかかわってよいか、自由な遊びの場面でどうふるまうてよいのか戸惑っている様子も見られた。

そこで、第3回目からコーナーを設置して、製作活動を提案することにした。毎回、一つのモデルと材料を提示し、必要に応じて担当者が作り方の説明を行うようにした。自由に選択できる活動の一つとしての提案であるが、親にとっては取りかかりやすい活動のようであった。そこでは親子が一緒に活動に取り組み、作ったものを大事に持ち帰る姿が見られた。

こうした経緯を踏まえ、2003年度は初回から製作コーナーを設置し、遊びの会のねらい達成のための重要な活動の場と位置づけて取り組むことにした。また、午前が変わって2年目ということもあり、在園児との交流を意図的に図ることを考えた。なお、みんなで活動する場面については、過去3年間の積み重ねを生かして行うことにした。

本稿の目的の一つは、2003年度の遊びの会の実践をふり返ることを通して、親子が一緒に活動を楽しみ、他の参加者との交流を深めることができる遊びの会の内容と方法を検討することである。二つ目は、幼児の遊びと生活の場であるという幼稚園の特色を生かした未就園児の遊びの会と子育て支援のあり方について考察することである。

本稿では、はじめに2003年度の取り組みの概要を述べ、次に主な場面の展開と参加者の様子を報告する。続いて年度の終わりに実施した参加者へのアンケート調査の結果を報告し、これらを資料として2003年度遊びの会の実践を評価する。最後に、本稿の目的に即して考察を行う。

I 2003年度遊びの会の概要と実施状況

1. 幼稚園の概要

幼稚園は満3歳から就学前までの幼児を対象とし、5クラス編成、定員120名である。

園の午前中の流れは、9時に登園し、自由に遊び、10時45分片づけ、11時からクラス活動になっている(12時昼食)。

2. 遊びの会のねらい

遊びの会のねらいは、「親子が一緒に遊び、楽しい経験をする」「身体を動かして遊ぶことで親と子、子ども同士、親同士の交流を深める」の二点である。

3. 遊びの会の対象と参加者

遊びの会の対象は主に未就園の2・3歳児とその保護者である。20組をめどに募集し、登録制とした。先着の29組で出発したが、希望者が多く、10月から曜日を変えてもう一つのグループを作って活動することにした。以降、はじめからのグループを第1グループ、後半からのグループを第2グループと呼ぶ。

第1グループの子どもの年齢構成は4月当初の年齢で、1歳児2名、2歳児11名、3歳児16名であった。内、2名は第2グループに移行した。毎回の参加者は、最も多いときで26組、少ないときで18組であった。

第2グループは10月に19組で出発したが(移行した2名を含む)、順次増えて11月は25組、1月には26組になった。子どもの年齢構成は、4月当初の年齢で、1歳児8名、2歳児9名、3歳児7名と1グループから移行した2歳児2名である。ただし、1歳児の内6名は会に参加

し始めた時点では2歳になっていた。参加者は17組から22組の範囲であった。

4. 日時と場所

第1グループは、2003年の5、6、7、10、11月と2004年1、2月に各1回ずつ、計7回実施した。第2グループは、2003年10月からの4回の実施である。時間は午前10時から11時30分までの1時間30分である。

場所は主に幼稚園のプレイルーム（遊びの会の日は専用となる）と遊戯室（時間帯により専用となる）および園庭である。

5. 活動内容と時間的流れ

会の時間的な流れは表1に示した通りである。来園した参加者は荷物を片づけ、出席カードにシールを貼った後、プレイルーム、遊戯室、園庭で自由に遊ぶ。プレイルームの一角に製作コーナーを置き、その日の製作活動を提示した。

10時30分頃から片づけをし、10時40分頃から遊戯室に集まってみんなでの活動に入る。毎回、名前を呼び、手遊びと身体を使った遊びを行う。11時10分頃からおやつを食べ、20分頃から絵本の読み聞かせをして、11時30分に終了となる。

表1 会の時間的流れ

10：00	始まり 自由に遊ぶ
10：30	片づけ
10：40	みんなで遊ぶ
11：10	おやつを食べる
11：20	絵本を見る
11：30	終了

6. 運営体制

担当者は幼稚園の教諭1名と短期大学の教員1名である。通常の保育と並行して行われるため、会の運営に直接かかわるのはこの2名であるが、園全体での共通理解と協力のもとに進められた。特に最終回は在園児と交流する形での「お店屋さんごっこ」を企画し、連携を密にして行った。

II 主な場面の展開と参加者の様子

1. 自由に遊ぶ場面

プレイルームにコーナーを作り、遊びの環境構成を整えるようにした。ままごとコーナーでは毎回数人の子どもが遊んでいた。パズル、指人形、こまなどで遊ぶ姿もあった。晴れた日は砂場で遊ぶ姿も見られた。遊戯室で積み木を使って遊ぶ親子もいた。それぞれが好きな遊びを見つけ、落ち着いて遊んでいた。

製作コーナーでは毎回、廃材を利用した製作を提案した。主に牛乳パックを使用し、家庭でも製作できるよう配慮した。また、作った後はそれを使って遊べるよう環境を構成した。例えば、さかなやつりざおを作った第3回（7月）には、青いビニールシートと積み木で池を作り、さかなつりができるようにした。

各回に提案して作ったもの、提案の意図、参加者の様子を表2に示した。取りかかり方は様々であるが、ほとんどの親子が製作に取り組み、楽しんでいた。親子が共同で一つのものを

表 2 製作活動

	作ったもの	提案の意図	参加者の様子
5月	じょうろ	お風呂でも遊ぶことができる	園庭で水を入れて遊ぶ姿が見られた。
6月	おさんぽかたつむり	季節にあったもので、引っ張って遊ぶ楽しさがある	ほとんどの子どもが気に入り、室内・室外をとわず、作ったかたつむりを引っ張って遊んでいた。
10月	さかな・つりざお・バック	季節にあったもので、家でも遊ぶことができる	作ったものを使って遊ぶ楽しさが感じられるようになってきた様子だった。親子で楽しそうに遊ぶ姿が見られた。
11月	くるくるたこ	外で走って遊ぶことができる	集中してたこに自分の好きな色を塗っていた。遊戯室などでたこを引っ張って遊んでいた（雨のため、外で遊ぶことができなかった）。 たこに色を塗ることやくるくと回る様子を楽しんでいた（雨のため、外で遊ぶことができなかった）。
12月	サンタのながぐつ 天使	季節にあったもので、のりを使った制作	のりの感触を楽しみながら親子で製作をしていた。できあがった作品を見てとても満足そうだった。 親子でオリジナルのアイデアを取り入れながら作る姿が見られた。
1月	けんだま	季節にあったもので、使って遊びこめるもの	幼児自身が製作しようとする姿が見られた。親は見守りながら援助していた。できあがったものを使って何度もチャレンジしていた。 親子が共同して作っていた。
2月	バック・お金	園児とかかわりを持った“お店屋さんごっこ”に使用できるもの	お買い物に出かけることを楽しみに、親子が共同して作っていた。とても楽しそうだった。 取りかかりがゆっくりな子どももいたが全員が製作をした。

注) 10月以降の2段に分かれている箇所は、上段が第1グループ、下段が第2グループの内容である。

作りあげる活動になっていた。また、作ったもので遊ぶ姿や遊ぶことを楽しみに作る姿が見られた。製作への取りかかりと作ったもので遊ぶ様子を事例1に示す。

最終回は作ったバックを持って在園児のクラスの「お店」に「お買いもの」に出かけた。在園児との交流でお店屋さんごっこを楽しむことができた（事例2）。

また、製作をしながら参加者同士が自然に交流する様子が見られた。

事例1 おさんぽかたつむり

モデルは牛乳パックで作ったかたつむりに模様を描き、ひもをつけたものである。モデルを見て、「かわいいね。作ってみようか」と始める親子もいれば、モデルを引いて遊んでから、作り始める親子もいる。しばらくしてから関心を示す子どももいる。

できあがるとさっそく引いて遊び出す。屋内だけでなく、園庭を引いて回る子どももいた。遊びの会が終わり、外に出てからもかたつむりを引いて歩く子どもたちがいた。

(第1グループ第2回：2003年6月18日)

事例2 お店屋さんごっこ

バックを選び、シールをはったり、リボンのひもを付けたりして自分のバックを作る。画用紙で作ったお金と買い物マップ（園内の地図）を持って親子とも嬉しそうに買い物に出かける。

3、4、5歳のそれぞれのクラスでお店が開かれている。部屋に入ったらマップ上のクラスの場所にシールを貼ってもらい、買い物をする。音楽会をするクラスもある（保育者がピアノを弾き、子どもたち数人が台の上で歌う）。

在園児が、親子が買い物に来るのを待ちきれずに、「〇〇組に来てください」と誘い

に来る。コンサートのチケットを持ってくる子どももいる。在園児も楽しみにしていることがわかる。

親子ともとても楽しそうに買い物をしてプレイルームに帰ってきた。

(第1グループ第7回：2004年2月18日)

2. みんなで活動する場面

みんなでの活動場面は、一人ひとりの子どもの名前を呼ぶことから始められる。名前を呼ばれることは嬉しい様子で、回が進むにつれ、ほとんどの子どもが返事をするようになった。子どもが返事をするると自然に拍手が起こり、親が代わって返事をする場合を含め、一人ひとりにみんなで拍手をするようになった。

次に、手遊びと身体を使った遊びをする。毎回の手遊び、身体を使った遊びの種類と参加者の様子を表3に示した。

手遊びは、くり返し遊ぶことを大切にしながらレパトリーを広げていった。そうした中で子どもたちも一緒に手指を動かして楽しめるようになっていった。

身体を動かしての遊びとしては、「手をつなごう」などの遊びうたやリズム遊び（音楽に合わせての体操など）、新聞紙を使い全身を使つての遊び、楽しいやりとりを含む簡単なおにごっこなどを行った。リズム遊びは音楽に合わせて身体を動かすことが楽しい様子で、前回行つ

表3 みんなでの遊びと絵本

	みんなでの遊び				絵本
	手遊び	遊びうた	リズム遊び	その他の遊び	
5月	一匹の野ねずみ たけのこ メロンパン	手をつなごう ひらいたひらいた	動物体操		どうすればいいのかな？ ももんちゃんのおしり
6月	たけのこ かたつむり	手をつなごう ひらいたひらいた	動物体操 かえるのみどりちゃん		ボートにのって
7月	たけのこ おふろ		動物体操 かえるのみどりちゃん	新聞紙を使って遊ぶ	ちびゴリラのちびちび ボートにのって
10月	おふろ 一匹の野ねずみ ゴリラとゴリラが		かえるのみどりちゃん	かえるオニ	どろんこ どろんこ！ おおきなかぶ
	とんがりやまのてんぐさん おふろ 一匹の野ねずみ	手をつなごう	動物体操 かえるのみどりちゃん		どろんこ どろんこ！ おおきなかぶ
11月	おふろ ゴリラとゴリラが	ラッコのおやこ でんしゃがはしる		テーブル劇“クリスマス”	ぐりとぐらのおきゃくさま
	おふろ とんがりやまのてんぐさん	ラッコのおやこ でんしゃがはしる		テーブル劇“クリスマス”	ぐりとぐらのおきゃくさま
1月	おけしょうバタバタ おみせやさん	さむい日には		風船で遊ぶ	ゆきのひはあついあついでぶくろ
	おけしょうバタバタ おみせやさん	さむい日には	かえるのみどりちゃん	風船で遊ぶ	てぶくろ
2月	おけしょうバタバタ おみせやさん ひよこ			おおかみさんいまんじ	かくれんぼももんちゃん はなをくんくん
	おけしょうバタバタ おみせやさん ひよこ	手をつなごう 輪ゴムになーれ			ちびゴリラのちびちび

注) 10月以降の2段に分かれている箇所は、上段が第1グループ、下段が第2グループの内容である。

たものを「またしたい」と楽しみにしている子どももいた。第1グループの新聞紙を使つての遊びは、ちぎった新聞紙を親たちが一齐に子どもたちにもふりかけるなど、ダイナミックな展開を楽しむことができた。最終回に行った「おおかみさん、いまなんじ」の遊びは、親子が一組でオニになり、交替しながら楽しむことができた。

3. 絵本を見る場面

毎回2冊の絵本の読み聞かせを行った（時間の関係で1冊のこともある）。遊戯室の一定の場所に敷物を敷き、読み手のイスを置くと、おやつを食べ終わった子どもから敷物に座って待つようになる。絵本の時間を楽しみにしている様子である。初めは親の近くで見ている子どももいるが、回を重ねるうちに読み手の前に子どもだけで集まって見るようになる。前に立ってきて他児に「見えない」と言われる経験もしながら、みんなで絵本を見ることができるようになっていく。

読み聞かせを行った絵本の名前は表3の通りである（リスト後掲）。

Ⅲ 参加者へのアンケート

1. 目的と方法

各グループの最終回の参加者を対象にアンケート調査を行い、遊びの会に参加しての感想や意見を尋ねた。目的は、2003年度の取り組みを振り返り、次の年度の参考とすること、および、幼稚園における子育て支援のあり方を考える資料とすることである。

はじめに参加回数を尋ね、続いて、開催回数、1回あたりの時間、会の流れが適当であったかを尋ねた。次に、製作コーナーについて、親子が楽しめたか、家でも遊んだものがあつたかを尋ねた。さらに、遊びの会に参加して良かった点を尋ねた。ここまでは選択式で回答してもらった。最後に、遊びの会に参加しての感想や意見を自由に記述してもらった。

記入台にアンケート用紙と筆記用具を用意し、最終回の遊びの会終了時にアンケートへの協力を呼びかけて、その場で記入してもらった。なお、回答は無記名とした。

2. 結果

① 回答数

第1グループ19名、第2グループ13名、合わせて32名から回答があつた。なお、最終回の参加者は、第1グループ19組、第2グループ17組であつた。

② 参加回数

2003年度遊びの会への参加回数を選択式で尋ねた。1回の回答はなく、2回2名、3回6名、4回5名、5回5名、6回8名、7回6名であつた。参加回数5～7回の回答者は第1グループに、2～4回の回答者は第2グループに属している。

③ 開催回数

年間7回という開催回数は適当であったかを、「適当だった」「多すぎた」「少なすぎた」の三つの選択肢をあげて尋ねた。結果は、表4の通りである。回答者全体のおよそ3分の2は「適当だった」を選択し、3分の1近くは「少なすぎた」を選択している。「多すぎた」の選択はなかつた。

表4 開催回数は適当か

	適当だった	少なすぎた	無 答	全 体
第1グループ	13	6		19
第2グループ	8	4	1	13
全 体	21	10	1	32

単位：人

④ 時間

1回が1時間半という時間は適当であったかを「適当だった」「長すぎた」「短すぎた」の三つの選択肢をあげて尋ねた。結果は、32名全員が「適当だった」を選択していた。

⑤ 会の流れ

会の流れ（自由な遊び→みんなでの活動→おやつ→絵本）が適当であったかを「適当だった」「適当ではなかった」の選択肢をあげて尋ねた。結果は全員が「適当だった」を選択していた。

⑥ 製作コーナー

製作コーナーについて三つの質問をした。まず、「お子さんは楽しそうでしたか」と尋ね、「楽しそうだった」「楽しそうでなかった」「どちらとも言えない」の三つの選択肢をあげて答えてもらった。結果は表5に示した通りである。全体の4分の3は「楽しそうだった」を選択し、4分の1は「どちらとも言えない」を選択している。第1グループ（参加回数5～7回）では約9割が「楽しそうだった」を選択しているのに対し、第2グループ（参加回数2～4回）は半数を超える程度となっている。

二つ目に、「ご家族の方は楽しかったですか」と回答者本人のことを尋ねた。「楽しかった」「楽しくなかった」「どちらとも言えない」の選択肢をあげたが、表5の通り、32名中30名が「楽しかった」を選択している。あとの2名は「どちらとも言えない」を選択していた。いずれも第2グループの参加者である。

表5 製作コーナーは楽しかったか

	子 ども		保 護 者		全 体
	楽しそうだった	どちらとも言えない	楽しかった	どちらとも言えない	
第1グループ	17 (89.5)	2 (10.5)	19 (100)		19 (100)
第2グループ	7 (53.8)	6 (46.2)	11 (84.6)	2 (15.4)	13 (100)
全 体	24 (75.0)	8 (25.0)	30 (93.8)	2 (6.3)	32 (100)

単位：人 (%)

三つ目に、作ったものの中で、家でも遊んだものがあるかを尋ねた。5月から1月までの六つの製作物あげ、遊んだものに○をつけてもらった。表2の通り、11月は第1グループがながつつ、第2グループは天使をそれぞれ作っている。

表6に結果を示した。第1グループの結果を見ると、ポットとたこについては19名中2名、ながつつ7名、さかなとつりざお9名、かたつむり12名、けんだまは13名が家で遊んだと回答している。無答者1名。第2グループでは、天使については4名、けんだまについては6名が家で遊んだと回答している。無答者は5名である。

表 6 家 で 遊 び だ 製 作 物

	ポット	かたつむり	さかなつり	たこ	ながぐつ／ 天使	けんだま
第1グループ	2	12	9	2	7	13
第2グループ	／	／	／	0	4	6

単位：人

⑦ 参加して良かった点

遊びの会に参加して良かった点を選択式で尋ねた。選択肢と選択数は、表7に記した通りである。「その他」の選択肢も用意したが、選択はなかった。

全体として見たとき、「親子で楽しむことができる」と「集団で活動して楽しむ経験ができる」が8割を超える高い比率で選択されている。次に高いのが「幼稚園生活についてのイメージがもてる」で5割、続いて「他の親子との交流がもてる」「砂場やままごとなど、園の設備や遊具で遊ぶ」が4割台になっている。「新しい遊びや絵本を知ることができる」は最も低く、25%の選択になっている。無答者はなかった。

表 7 参 加 し て 良 か っ た 点

	第1グループ	第2グループ	全 体
親子で楽しむことができる	17 (89.5)	10 (76.9)	27 (84.4)
他の親子と交流がもてる	7 (36.8)	8 (61.5)	15 (46.9)
集団で活動して楽しむ経験ができる	15 (78.9)	11 (84.6)	26 (81.3)
新しい遊びや絵本を知ることができる	5 (26.3)	3 (23.1)	8 (25.0)
砂場やままごとなど、園の設備や遊具で遊ぶ	7 (36.8)	6 (46.2)	13 (40.6)
幼稚園生活についてのイメージをもてる	9 (47.4)	7 (53.8)	16 (50.0)
全 体	19 (100)	13 (100)	32 (100)

単位：人 (%)

⑧ 参加しての感想・意見

最後に遊びの会に参加しての感想や意見を自由記述式で尋ねたところ、第1グループ18名、第2グループ9名の計27名より回答があった。

最も多かったのは、楽しかったという感想である(12名)。「親子で楽しく参加できた」「製作が楽しかった」「友だちができて楽しかった」など、楽しさの中身を具体的にあげた回答もあった。幼稚園生活についてのイメージがもてたという記述が4件、次年度も参加したい、近所の人に勧めるなどの肯定的な評価も3件見られた。手遊びや製作など、家での遊びにつながったという記述が2件、「返事ができるようになった」「絵本が聞けるようになった」という子どもの変化を喜ぶ内容も2件あった。また、同年齢の子どもと遊ぶ機会ができて嬉しいという記述もあった。

他方、回数を多くしてほしいという意見が4名に見られた。途中からの参加で仲良くなるまでにはいたらなかったことを残念とする感想もあった(第2グループ)。また、「年齢差があり、集中したい時に集中できない」という記述もあった(第2グループ)。おやつの内容について

の意見も2件寄せられた。

Ⅳ 遊びの会の実践の評価

1. 開催回数・時間・会の流れ

アンケートの結果は、1時間半という時間や会の流れは適当と受けとめられていることを示している。参加者の姿を見ても無理なく楽しく参加できている様子であることから時間と会の流れは適当であったと考えられる。開催回数についてはもっと多くしてほしいという声が少なからずあるが、それに応えるには場所やスタッフの面など、通常の保育との兼ね合いが問題となる。2004年度の遊びの会は2グループ制でそれぞれ年7回の実施になるが、園庭開放を行い、遊びの会の参加者も園で遊ぶ機会を増やせるようにした。

2. 製作コーナー

製作活動については、保護者のほとんどが楽しいと感じていることがわかった。子どもについてもアンケート回答者の4分の3が「楽しそう」と感じている。参加回数の多いグループでは9割近くが「楽しそうだった」を選択している。子どもたちの月齢の違いも考えられるが、「一緒に作る」「作ったもので遊ぶ」という経験を重ねることで、製作活動が楽しいものになっていったと考えられる。

製作されたものは家に帰ってからも遊びに使われている。また、家でも工作を行うようになったという自由記述もあり、子どもの活動の幅を広げる機会にもなっていたことがわかる。

製作活動は、親にとって楽しい活動であり、子どもと一緒に楽しむことのできる活動になっていたと考えられる。また、製作という共通の活動が話題となるためか、親同士にも自然なやりとりが生まれるようである。製作活動の提案は、親同士の交流を深めるという遊びの会のねらいから見てもふさわしい取り組みになっていたと言えよう。

3. 遊びの会の意味

遊びの会が親子にとってどのような意味をもっていたかをねらいに照らして振り返って見る。アンケートの結果は、「親子が一緒に遊び、楽しい経験をする」という会のねらいがおおむね達成されたことを示している。「身体を動かして遊ぶことで親と子、子ども同士、親同士の交流を深める」というねらいについても、集団で活動して楽しむ経験ができたという点では大方達成できたと言えよう。しかし、参加して良かった点として「他の親子との交流がもてる」を選択したのは全体の46.9%である。このことは活動を通して交流することと、交流がもてたという実感とのズレを示しているのではなかろうか。今後、園庭開放等を進める中で、遊びの会のあり方やそこでの交流の意味をさらに考察していく必要があるだろう。

参加できてよかった点として回答者の半数が、幼稚園生活についてのイメージがもてることをあげていた。自由な遊びの時間は、園庭や遊戯室など、在園児と活動の場所を共有しており、園児の生活の様子が自然に目に入ったであろう。お店屋さんごっこでは、親子が各クラスに向き、交流している。親子にとっても在園児にとっても楽しい活動になったばかりでなく、保護者にとっては幼稚園生活をより具体的にイメージする機会になったと推測される。

自由記述の中には、返事ができるようになったり、絵本が聞けるようになったりという子どもの変化を喜ぶ記述があった。親たちはまた、自分の子どもだけでなく、他の子どもの変化にも目をとめているようである。名前を呼ぶ場面で子どもが返事をする、感心したように拍手

をしている。遊びの会は、家庭とは違った状況の中で、子どもの成長を確かめる機会になっていたと言えよう。

V 考 察

本稿の目的の一つは、2003年度の実践を通して、親子が一緒に活動を楽しみ、他の参加者との交流を深めることができる遊びの会の内容と方法を検討することであった。親たちは必ずしも子どもの遊びに自然に参加できるわけではない。親が子どもの遊びを見守るだけでなく、一緒に楽しむことをねらいにする場合には、子どもが遊びを見つけ、落ちついて活動できるような環境構成に加え、親自身にとっても楽しく活動に参加しやすい環境の構成がポイントになると考えられる。製作活動の提案を通し、自由な場面においても、親が子どもと一緒に楽しむことのできる活動を提示することの大切さを確認できたと考える。また、活動しながら場を共有することは、参加者同士の自然な交流につながる。従来行ってきたみんなで活動する場面での交流に加え、自由な遊び場面での交流を促進する取り組みとして評価できるのではなかろうか。

2003年度提案された製作活動は、親子が一緒に楽しむことのできる内容であったと同時に、親が子どものできる場所を見つけながら共同することで実現できるものであった。遊びの会が親子が一緒に活動する場であることを生かした内容であるとも言える。こうした視点からの活動内容の検討も大切であると考えられる。

目的の二つ目は、幼児の生活の場であるという幼稚園の特色を生かした未就園児の遊びの会と子育て支援のあり方について考察を深めることであった。幼稚園は子どもたちが安全に楽しく過ごせるよう、建物、設備、遊具などの環境が整えられている。アンケート回答者の4割が園の設備や遊具で遊ぶことを良かった点として選択していることから、施設の開放は重要と考えられる。また、在園児との交流がお互いにとって楽しい活動を通して実現されたことは、在園児と未就園児の双方にとって意味のある交流を遊びの会に位置づける可能性を示すものと考えられる。

読み聞かせて取り上げた絵本のリスト（取り上げた順）

- ①『どうすればいいのかな?』（渡辺茂夫 文/大友康夫 絵、福音館、1977）
- ②『ももんちゃんのおしのおし』（とよたかずひこ 作・絵、童心社、2002）
- ③『ボートにのって』（とよたかずひこ 作・絵、アリス館、1997）
- ④『ちびゴリラのちびちび』（ルース・ボーンスタイン 作/岩田みみ 訳、ほるぷ出版、1979）
- ⑤『どろんこ どろんこ!』（渡辺茂男 文/大友康夫 絵、福音館、1981）
- ⑥『おおきなかぶ』（ロシア民話/A. トルストイ 再話/内田莉沙子 訳/佐藤忠良 画、福音館、1962）
- ⑦『ぐりとぐらのおきゃくさま』（中川李枝子 文/山脇百合子 絵、福音館、1966）
- ⑧『ゆきのひはあついあつい』（いわむらかずお 絵と文、至光社、1997）
- ⑨『てぶくろ』（ウクライナ民話/エウゲーニー・M・ラチョフ 絵/うちだりさこ 訳、福音館書店、1965）
- ⑩『かくれんぼももんちゃん』（とよたかずひこ 作・絵、童心社、2003）
- ⑪『はなをくんくん』（ルース・クラウス 文/マーク・サイモント 絵/きじまはじめ 訳、福音館書店、1967）

文 献

- 1) 小田豊編著『子育て支援・預かり保育』チャイルド本社, 2000
- 2) 柴崎正行「その他の支援」藤崎真知代・本郷一夫・金田利子・無藤隆編著『育児・保育現場での子育て支援』第8章2の6), ミネルヴァ書房, 201-204, 2002
- 3) 杉山弘子・鶴間順子・坂本由佳里・斎藤亜紀「幼稚園における子育て支援についての一考察—未就園児の遊びの会の実践を通して—」尚綱女学院短期大学研究報告第49集, 31-43, 2002